

論文

歌舞伎の収支計算

江戸時代の歌舞伎興行と役者の給金

宮内輝武

(1)

歌舞伎が定着し、華やかに展開したのは上方では芳沢あやめ⁽¹⁾、坂田藤十郎⁽²⁾などの名優が妍を競い、江戸でも初代市川団十郎⁽³⁾が中心となった元禄時代からと思われる。小論では1700年代に興隆期を迎えた歌舞伎の経済性について焦点をあててみたい。

内容としては第一に「千両役者」という言葉で象徴されるように、当時としては破天荒な高給がとれる歌舞伎役者の生活にふれ、第二にこのような大きな人件費を負担している歌舞伎興行の収支計算がどうなっているか。第三には、このような歌舞伎興行を維持するため入場料がどのように設定されているか、また、その料金を一般大衆がどのように負担したかを検討して見たい。

以上の三点を解明して、現代でも透明でない演劇興行の実態を経済面から探求するのがこの稿の目的である。⁽⁴⁾

注：

- (1) 初代芳沢あやめ(1673-1729)は三都随一の名女形といわれ、「役者論語」のなかに価値の高い「あやめ草」という芸談を残している。
- (2) 坂田藤十郎(1645-1709)は上方歌舞伎の大立者。芳沢あやめと同様に「役者

論語」のなかの金子吉左衛門が記述した「耳塵集」に芸談が記録されている。

- (3) 初代市川団十郎（1660－1704）は荒事という豪快な歌舞伎を創設し元禄期の代表的名優。
- (4) 本稿では年号別米価による換算により現在の円価格に換算して表示している。
宮内輝武稿「飲食物の収支計算」白鷗女子短大論集（第14巻・第2号）1990.3
P64－65参照

(2)

文政年間（1818－1829）の大工職の記録によると一日の手間賃は飯米料とも銀5匁4分（¥6,986）で年間294日働いたとして銀1貫587匁6分、両に換算して約26両（約¥2,019,342）の収入になる。ちなみに、その支出額は家族3人（夫婦と子供1人）として約25両で、一応収支が均衡している。⁽⁵⁾

この暮らしは、当時の平均的な職人の生活状態と考えられるが、図表－1で示すように、一部の歌舞伎役者の給金がいかに高額であったかが窺える。もし千両役者といわれる俳優の実質収入が千両あったとすると、四千石の武士と同程度の収入であった。⁽⁶⁾

「千両役者」の出現は正徳年間（1711－1715）で、当時の人気役者の初代芳沢あやめ、二代目市川団十郎⁽⁷⁾が初めての千両役者といわれている。

図表－1 歌舞伎役者・狂言作者等の給金表⁽⁸⁾

| 年度 | 西 暦 | 氏 名 | 給金(年) | 換算(円) | 備考 |
|-------|-----------|----------|--------|-------------|----|
| 元禄年間 | 1688－1704 | 岩井半四郎 | 120(両) | 8,238,600 | 役者 |
| 元禄7年 | 1694 | 市川団十郎(初) | 500 | 34,327,500 | 役者 |
| 元禄14年 | 1701 | 坂田藤十郎 | 500 | 34,327,500 | 役者 |
| 正徳年間 | 1711－1715 | 芳沢あやめ(初) | 1,000 | 44,781,000 | 役者 |
| | | 市川団十郎(二) | 1,000 | 44,781,000 | 役者 |
| 享保年間 | 1716－1736 | 近松門左衛門 | 50 | 7,068,650 | 作者 |
| 明和安永 | 1764－1781 | 並木五瓶 | 300 | 22,495,200 | 作者 |
| 寛政年間 | 1789－1801 | 尾上菊五郎 | 500 | 37,492,000 | 役者 |
| 文化年間 | 1804－1818 | 中村歌右衛門 | 1,500 | 112,695,000 | 役者 |
| 文政11年 | 1828 | 鶴屋大南北 | 175 | 13,581,725 | 作者 |

しかし、千両役者が実質的に千両（¥44,781,000）の収入があったかどうかには多少疑問がある。

例えば、「劇場新語」という記録に『役者の給金千両などという事は誠に故あることにや、いずれ段々高下あることにて座頭の立役、女方の立役となれば千両取と申す事も有なれども、一体役者というものは顔を売る渡世故とらぬ金も取様に人に聞ゆる方よろしき事なるべし。（後略）』⁽⁹⁾ とある。喜田川守貞の「守貞漫稿」にも『・・・年給千両のものを千両役者としー（中略）一大略一年のうち六ヵ月興行、六ヵ月は休みの故に千両役者もその所得は全く五百両ばかりにてー（後略）』⁽¹⁰⁾ とかかかれているがどのような根拠があるか明確ではない。

人気商売である役者が、見栄のために取らぬ給金を取ったように自己宣伝した事実もあったであろうが、伊原敏郎の「日本演劇史」によれば、『以上掲ぐる金額は無論一ヵ年間にたいする報酬にして、元禄までは一年に幾回と興行数に一定の規律なく、三回乃至四、五回なりしが、江戸にては、正徳4年より一年六回の興行と定まり、さらに享保6年5月、二世団十郎が中村座に大当たりせし時、褒美として給金千両と極められ、且つ毎年六月興行を休むべき特権を得たりという。されば、当時一年六回の興行のうち、一回を引去りて、五回の興行に千両を受取る約束なりしならん。』⁽¹¹⁾ とあり、必ずしも名目だけのものではなかったようだ。

安永5年（1776）刊行の「役者論語」のなかの「佐渡島日記」に二世市川団十郎が大阪の芝居に出演したときの給金が二千両で『歌舞伎芝居始りて以来、給金貳千両取やくしゃ聞も及ばず・・・』⁽¹²⁾としている。このような高給が支払われた事実も存在している。

この高給をとる幹部俳優のほか多くの役者・裏方などが演劇の世界には必要で、この人達の人件費や、興行のための諸経費は大きな額であったであろう。明和6年（1769）の江戸三座（中村座・市村座・森田座）の構成人員は図表－2の通りで中村座が370名、市村座は335名、森田座は253名となっている。しかし、「芝居乗合船」（1788－1801）によれば、この多くの座員の

うち給金をとっているものは14-15名で、あとは無給の渡世人でどうして妻子を養っているかよくわからない「不思議な」世界としている。⁽¹³⁾

図表-2 江戸三座の構成人員（明和6年 1769）⁽¹⁴⁾

| | 中村座 | 市村座 | 森田座 |
|-------------|-----|-----|-----|
| 役 者 | 76 | 67 | 62 |
| 作者と囃子方 | 31 | 30 | 28 |
| 頭取・手代・外・総出方 | 263 | 238 | 163 |
| 合 計 | 370 | 335 | 253 |

要するに、各興行単位が、300名にも達する構成人員を持っているが、その中には、ほとんど無給の座員や、役者に比べてはるかに薄給といえる狂言作者達によって構成されているところに歌舞伎興行の秘密があり、損益計算の不透明さもこの当りに原因がある。鶴屋南北という文化文政年間（1804-1830）の狂言作者の第一人者でも、給金は幹部役者の十分の一の175両しかなかった。このことは、歌舞伎界の人件費等の二重構造を明確に示しているのである。

しかし、このような俳優の給金の上昇は経営者側にとっては大問題であり歌舞伎興行の継続を困難にし、寛政6年（1794）にいたって江戸三座は『狂言座取締方議定証文』という協定を結び公儀の保障を得た。

1. 役者の給金は五百両を限度とする。
2. 興行の収支を年毎に清算し、借金を翌年に持越さないようにする。
3. 三座が協定して俳優の座組を優劣のないようにする。
4. 木戸番その他の座員を増さない。

などを定めた。⁽¹⁵⁾

この協定も数年後には有名無実になり、加役の化粧料や衣装料という名目で協定以外の給金をとる役者が増加し、文化文政（1804-1830）の頃になると、中村歌右衛門が年千五百両、坂東三津五郎が千三百両をとるにいった。

天保年間（1830—1843）に至って幕府は政治改革をおこない、贅沢の禁止、風俗肅正などを強行し、その影響は演劇界にも大きな変化をもたらした。

その具体的内容は、

1. 劇場の数を減らし、とくに宮芝居は取り払う。
2. 役者の衣服の取締。
 - ① 上下、袴などを芝居以外では着ては行けない。
 - ② 往来には編笠をかぶること。
 - ③ 一枚草履をはくこと。
3. 役者の給金を1年五百両以下とする。
4. 湯治または神社仏閣の参詣に託して旅稼ぎをしてはならない。
5. 入場料の制限。
 - ① 上栈敷150匁（¥138,300）を31匁（¥28,582）に引き下げる。
 - ② 下栈敷110匁（¥101,420）を29匁（¥26,738）に引き下げる。
 - ③ 上場2貫800文（¥39,200）を1貫500文（¥21,000）に引き下げる。

この禁令に反したとして、市川海老蔵（七代目団十郎）は江戸十里四方追放に処せられ、中村富十郎（二代目）、片岡我童なども譴責や科料に処せられている。⁽¹⁶⁾

天保改革に関連するこれらの出来事は、幕府の財政立て直しという目的から拡大解釈されて、庶民生活に華を添えていた歌舞伎界まで統制の対象となってきたのである。板坂元氏が指摘したように『消費抑制の面が道德意識と混同して、町人の娯楽・遊興にまで過酷な弾圧が加えられたもの』で、歌舞伎役者が特に弾圧の対象になったのは『役者を河原乞食と差別していた時代に、千両役者と呼ばれて、数千石の侍なみの、いやそれより豪華な生活をしている役者がいるのは、なんとも我慢できなかった』⁽¹⁷⁾ことに起因したと考えられる。

また、役者自身の生活にも常軌を逸した部分もあり、初代坂田藤十郎（1645—1709）が大阪の芝居に出演したとき、京都から水を樽詰めにして取り寄

せ、飲用に供したとか、飯米を一粒よりにして食したことなどが伝えられ、このようなことについての反発も多かったと思われる。⁽¹⁸⁾

坂田藤十郎と殆ど同時代に儒学者の新井白石（1657－1725）は俳優についての三つの大害を指摘している。

1. 民の風俗をやぶる。（怠惰のくせをつける）

2. 国の財をつくす。（無用な費用を浪費する）

3. 下々が上に対する敬意を失う。（封建制度の根本的な身分制度の破壊）
おそらく、この指摘は当時の知識人の代表的な意見であり、歌舞伎を罪惡視する基礎理念となり、ますます一般大衆の意見とは遊離するものとなってきた。⁽¹⁹⁾

注：

(5) 小野武雄編著「江戸物価事典」昭和58年 展望社 P187

(6) 作道洋太郎著「お金の日本史」昭和53年 日本経済新聞社 P83

(7) 二代目市川団十郎（1688-1758）初代の芸風を継ぎ江戸第一流の名優となる。
（山川出版社版 日本史小辞典による）

(8) 大阪市史 第1巻・第2巻

小野武雄著 「江戸物価事典」

伊原敏郎著 「日本演劇史」

河竹繁敏著 「歌舞伎講話」

渥美清太郎著「歌舞伎大全」

竹越与三郎著「日本経済史」

飯塚友一郎著「歌舞伎概論」

以上を参考として役者の給金を抜粋した。

(9) 山本勝太郎著「歌舞伎の経済史的考察」昭和2年 宝文館 P215

(10) 守貞漫稿は嘉永年間（1848－1854）喜田川季杜（守貞）によって記録されたもので、風俗・習慣等広範囲な資料が収集されている。
喜田川守貞著朝倉治彦編「守貞漫稿」昭和63年 東京堂出版 P458

(11) 伊原敏郎著「日本演劇史」昭和37年（復刻昭和57年）早稲田大学出版部（藤森書店）P755

(12) 安永3年（1774）に刊行された「佐渡島日記」（役者論語）に記載されている。
郡司正勝校注「歌舞伎十八番集」日本古典文学体系（98）昭和40年 岩波書店 P373

(13) 服部幸雄著「歌舞伎の構造」昭和45年 中公新書 P32－33

- (14) 伊原敏郎著「日本演劇史」昭和37年（復刻昭和57年）早稲田大学出版部（藤森書店）P750-753 より作成
この人員の計算に多少疑問がある。服部幸雄著「歌舞伎の構造」によれば、中村座346名、市村座323名、森田座211名となっている。
- (15) 飯塚友一郎著「歌舞伎の構造」昭和3年 博文館 P456-459
- (16) 「大阪市史」第2巻 P719-720
- (17) 板坂元著「町人文化の開化」昭和50年 講談社現代新書 P172
- (18) 「賢外集」（役者論語）前掲「歌舞伎十八番集」 P356
- (19) 飯塚友一郎著「近世演劇論史」（岩波講座 日本文学史 第9巻 近世）昭和34年 岩波書店 P20-21

（ 3 ）

江戸時代の歌舞伎興行の収支計算の実態について考えてみたい。芝居興行は「水もの」といわれ、採算計算が予測できないという不確実な企業であることは、現在も、江戸時代もあまり変わっていない。歌舞伎界の知恵袋といわれる中村又五郎と、山田五十鈴の芸能対談で、通常芝居興行は七分立ちといって、客が七分入れば採算が取れるように計画し、八分入れば大入で利益が計算できるが、都会・田舎を問わず、この七分入りもなかなかむずかしく、損を重ねる事も多かったとしている。⁽²⁰⁾

嘉永4年（1854）といえは黒船騒動で世情騒然とした時代で芝居見物どころではないというわけか、「藤岡屋日記」によると、江戸三座の一つ中村座では『・・・異国船騒動ニ付、見物人少く、十五日・十六日も漸々八止りニて、跡は五六之入ニて、我童の評判も無之、右に付、同二十九日、我童病氣之由を申立、今日より芝居相休候よし。』というありさまで、河原崎座・市村座も、見物客の入りの悪さや金主がつかないのを理由に興行を見合わせていたところ、南御番所から呼び出しがあり、芝居を休むと『世上種々之取沙汰有之候間、早々芝居興行致し候様被仰付候也』と採算を無視しても芝居興行の継続を幕府が要求しているという記録がある。⁽²¹⁾

黒船騒動から約27年前の文政10年（1827）11月から、翌年の8月までの収

支計算書が奉行所に提出されているが、いずれも赤字決算で芝居興行の酷しさを物語っている。（図表－３参照）

図表－３ 江戸三座収支決算表（文政10年11月－11年８月）⁽²²⁾

| | 中村座 | 市村座 | 河原崎座 |
|-----|----------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 収 入 | 5,654両 3 分 ¥439,187,469 | 5,646両 1 分 2 朱 ¥438,537,007 | 2,245両 1 分 2 朱 ¥174,391,540 |
| 支 出 | 7,700両 ¥598,035,900 | 8,239両 3 分 2 朱 ¥639,966,372 | 6,338両 2 分 2 朱 ¥492,301,988 |
| 損 失 | 2,045両 1 分 ¥158,848,431 | 2,593両 2 分 ¥201,429,365 | 4,093両 1 分 ¥317,910,448 |

収入¥100あたり支出高 中村座¥136 市村座¥145 河原崎座¥282

（注） 原資料には金目以外に銀、銭の収入が書かれているが、ここでは除外して計算している。従って資料とは誤差がある。

この収支決算書によれば、100円の収入を得るために、中村座では136円の経費が必要であり、市村座では145円、河原崎座で282円となり、いずれも採算割れを示している。参考までに昭和59年２月決算の松竹株式会社の演劇興行の収支をみると、演劇収入100円につき経費合計101円となり、僅かながら採算割れになっている。⁽²³⁾

飯塚友一郎氏や服部幸雄氏が収録した狂言作者、二世中村重助（1745－1803）の『芝居乗合船』には当時の興行の経済的実態を知るための好資料が提供されている。⁽²⁴⁾

その第一は歌舞伎役者の給金および諸経費の支払いで年間６回に分割されて支払われている。（図表－４）はその支払い方法を示すものであるが、収入の状況によっては通常10月の顔見世の際に支払われる３分の１の給金も、座元の都合で更に３回に分割されて支払われるという例も挙げられている。

しかし順調に支払われる時ばかりではなく、芝居は水ものといわれるよう

に、不入りのために定められた給金も滞りがちのこともしばしばあり、「役者論語」の「佐渡島日記」にも、役者というものは金銀に眼をくれるものではなく、芝居が不当りで、劇場経営が赤字の時は、役者の方から給金をまけて、我慢をして出演した事があると述べているし、⁽²⁵⁾ 三代目中村仲蔵の自伝「手前味噌」にも、陰暦11月（霜月）の興行が不調で出方一同が頼みにきたので、仲間を誘って「無給金」で出演したという記載がある。⁽²⁶⁾

第二に歌舞伎の入場料収入についての概算として「役者乗合船」には（図表－5）のような数値が記載されている。このような収入が可能かどうかについては次の項で触れてみたいが、もしこのような入場料収入があったとしたら、採算がとれて、金主（出資者）にも相当の利益がもたらされたことになる。それを現金出納帳の形式でまとめたのが（図表－6）である。

この現金出納帳では金主の出資金を2,333両としているが、この額は必要経費の単純な合計で根拠のあるものではない。

このような収支ならばまことに健全で 100円の収入をあげるのに、経費が 81円であったということになる。⁽²⁷⁾

図表－4 歌舞伎役者の給金・諸経費の支払い方法⁽²⁸⁾

| 回数 | 支払月日 | 摘 要 | 金額(両) | 換算(円) |
|-----|--------|-------------|-------|-------------|
| 1 | 10. 17 | 顔見世払い(3分の1) | 2,333 | 181,197,111 |
| 2 | 1. 7 | | 933.4 | 72,494,377 |
| 3 | 3. 3 | | 933.4 | 72,494,377 |
| 4 | 5. 5 | | 933.4 | 72,494,377 |
| 5 | 7. 7 | | 933.4 | 72,494,377 |
| 6 | 9. 9 | | 933.4 | 72,494,377 |
| 合 計 | | | 7,000 | 543,669,000 |

注：1. 顔見世払いも 9.12(30%) 10.17(20%) 10.31(50%) に分割のされる時がある。

2. 5月、9月の支払いは分月と称して日割り計算で支払われることが多い。

図表－5 歌舞伎の入場料収入⁽²⁹⁾

| 摘 要 | 実興行日数 | 日の収入(両) | 合計(両) | 換算(円) |
|-------------------|-------|---------|-------|-------------|
| 顔見世狂言11. 1－12. 10 | 30 | 60 | 1,800 | 139,800,600 |
| 初春狂言 1. 15－ 2. 28 | 40 | 30 | 1,200 | 93,200,400 |
| 弥生狂言 3. 3－ 4. 30 | 50 | 40 | 2,000 | 155,334,000 |
| 五月狂言 5. 5－ 6. 5 | 30 | 30 | 900 | 69,900,300 |
| 盆 狂言 7. 15－ 8. 31 | 40 | 40 | 1,600 | 124,267,200 |
| 菊月狂言 9. 9－10. 10 | 30 | 30 | 900 | 69,900,300 |
| 計 | 220 | | 8,400 | 652,402,800 |

図表－6 歌舞伎興行円換算現金出納帳⁽³⁰⁾

単位：千円

| 月 日 | 摘 要 | 収 入 | 支 出 | 残 高 |
|-------|--------------|---------|--------|---------|
| 9／？ | 金主より出資金 | 181,197 | | 181,197 |
| 12 | 役者給金手付金(世界初) | | 46,600 | 134,597 |
| | 給金以外の仕込金 | | 25,863 | 108,734 |
| 10／17 | 役者給金(寄初) | | 31,066 | 77,668 |
| 31 | 役者給金 | | 77,668 | 0 |
| 12／10 | 入場料収入 | 139,800 | | 139,800 |
| 1／7 | 役者給金 | | 62,133 | 77,667 |
| | 仕込金 | | 10,360 | 67,307 |
| 2／28 | 入場料収入 | 93,200 | | 160,507 |
| 3／3 | 役者給金 | | 62,133 | 98,374 |
| | 仕込金 | | 10,360 | 88,014 |
| 4／30 | 入場料収入 | 155,334 | | 243,348 |
| 5／5 | 役者給金(分月) | | 55,920 | 187,428 |
| | 仕込金 | | 10,360 | 177,068 |
| 6／5 | 入場料収入 | 69,900 | | 246,968 |
| 7／7 | 役者給金 | | 62,133 | 184,835 |

| | | | | |
|-------|-----------|---------|---------|---------|
| | 仕込金 | | 10,360 | 174,475 |
| 8/31 | 入場料収入 | 124,267 | | 298,742 |
| 9/9 | 役者給金 | | 55,920 | 242,822 |
| | 仕込金 | | 10,360 | 232,462 |
| 10/10 | 入場料収入 | 69,900 | | 302,362 |
| | 出資金返済 | | 181,197 | 121,165 |
| | 出資者への利益配当 | | 121,165 | 0 |
| | 合 計 | 833,598 | 833,598 | 0 |

注：

- (20) 中村又五郎・山田五十鈴対談「芝居万華鏡」昭和57年 C-BOOKS 中央公論社 P24
- (21) 鈴木棠三・小池章太郎編「藤岡屋日記」第六巻 1989年 三一書房 P99
吉原健一郎著「江戸の情報屋」昭和58年 日本放送出版協会 P149-150
- (22) 飯塚友一郎著「歌舞伎概論」昭和3年 博文館 P467
- (23) 松竹株式会社「有価証券報告書総覧」昭和59年 大蔵省印刷局
- (24) 飯塚友一郎著「歌舞伎概論」P464-467
服部幸雄著「歌舞伎の構造」P32-36
- (25) 「佐渡島日記」（役者論語）歌舞伎十八番集 P370
- (26) 郡司正勝校訂「手前味噌」昭和19年 日本演劇集成第1 北光書房 P547
- (27) 飯塚友一郎著「歌舞伎概論」P464-467
服部幸雄著「歌舞伎の構造」P32-36
- (28) 飯塚友一郎・服部幸雄著「前掲書」
足立直郎著「歌舞伎劇場女形風俗細見」P83-84
- (29) 服部幸雄著「前掲書」P34
- (30) 飯塚友一郎・服部幸雄著「前掲書」

(4)

嘉永年間（1848-1854）に刊行された喜田川守貞の「守貞漫稿」⁽³¹⁾に享和3年（1803）発行の「芝居訓蒙図表」所載の劇場の観客席の配置と、その料金が紹介されている。原図は地球儀のように円形に書かれているが、それを

图 表-7

[illegible][illegible]

| 名 稱 | 上 下 |
|----------|-----|
| A 列 | 上 下 |
| A 1- 8 | 內 外 |
| A 9- 12 | 太 夫 |
| A 13- 20 | 平 |
| B 列 | 下 上 |
| B 1- 8 | 內 翠 |
| B 9- 14 | 外 翠 |
| B 15- 20 | 新 格 |
| C 列 | 本 土 |
| | 間 |
| D 列 | 前 土 |
| | 間 |
| E 列 | 土 間 |
| | 切 落 |

| 記 号 | 間 | @ | 金 額 | 換算 |
|--------|----------|------|--------|------|
| A 1 | 2 | 25匁 | 50匁 | |
| A 2 | 2 | 30 | 60 | |
| A 3-8 | 12 | 35 | 420 | |
| A 9-12 | 8 | 35 | 280 | |
| A13-15 | 6 | 30 | 180 | |
| A16-20 | 10 | 20 | 200 | |
| 小 計 | 40 | | 1190 | 1416 |
| B 1 | 2 | 20 | 40 | |
| B 2 | 2 | 25 | 50 | |
| B 3-8 | 12 | 35 | 420 | |
| B 9-12 | 8 | 35 | 280 | |
| B13-14 | 4 | 30 | 120 | |
| B15-20 | 12 | 25 | 300 | |
| 小 計 | 40 | | 1210 | 1512 |
| C | 26 | 25 | 650 | |
| D | 126 | 25 | 3150 | |
| 小 計 | 152 | | 3800 | 4750 |
| | 席 | | | |
| E 切落 | 200 | 162匁 | 32400匁 | |
| 切見 | 150 | 16 | 2400 | |
| | 350 | | 34800 | 661 |
| 總 計 | 匁換算・單位千匁 | | | 8339 |

推定入場人員1338名

もとに作成したのが、(図表－7)である。図の一部は推定によって補足した物で、正確ではないが一応概算的には誤差がないと仮定して入場金をも計算したものである。

この金額には芝居茶屋の手数料も含まれているし、大入で満席ということは、例外的な出来事だとすれば、ここで計算した入場料の総額の40%から50%が実質的な収入であったと考えられる。

入場定員を推定すると、図表－7の中村座や市村座では満席として1338名寛政期(1789－1800)の大阪の劇場では1344名、文化・文政期(1804－1930)の江戸市村座の復元図から推定すると1286名となり、多数の観客を収容できる規模を持っていたのである。⁽³²⁾

つぎに、歌舞伎の入場料金の推移を「上棧敷」(図表－7のA列)の代価でみると、正徳年間(1711－1716)では1貫2百文(¥13,434)。それから約50年後の明和年間(1764－1772)では荒木芝居で1貫5百文(¥25,176)となり、さらに寛政頃(1789－)になると京都で2貫6百文(¥48,739)とまで上昇している。以降天保・嘉永(1830－1854)になって幕末のインフレーションの影響もあって銀60匁から70匁(¥56,040－¥65,380)という高値となっている。(図表－8)参照⁽³³⁾

なお、当時の芝居見物には入場料のほかに付随的な費用が必要で、文化頃(1804－1818)の芝居茶屋の勘定書によると、1桝4人で土間代金銀25匁(¥31,300)のほか飲食代その他を含めて総額で銀47匁(¥58,844)となり、入場料金の倍近い費用が必要だった。1人あたり¥14,711となる。⁽³⁴⁾

特例かもしれないが、芝居好きの店者(商家の従業員)が芝居見物のために消費した金額の記録のいくつかをあげてみると、

- ① 安政2年(1855)4人で金2両3分と銭72文(計¥139,571)。1人あたり¥34,892。
- ② 嘉永6年(1853)3人で金4両2分と銀2匁(計¥254,066)。1人あたり¥84,688。ただし、この金額には芝居以外の遊興費がふくまれている。

- ③ 弘化2年(1854)店者の粕淵徳兵衛が3人で芝居見物をし役者への祝儀を含めて4両1分2朱(¥245,193)を支払い、翌年にも同様に5両2分(¥308,242)の浪費が記録されている。⁽³⁵⁾

同時代の明和年間(1764-1772)の店者の年給は元服後3年までは4両(¥268,544)、4年目以後は5両(¥335,680)、買出役になると6両(¥402,816)、最高の支配役で10両(¥671,360)で1回の芝居見物に3両・4両の出費は不可能で店の金の流用などの悪事がおこりがちであった。⁽³⁶⁾

図表-8 上棧敷代金の推移表

| 年代 | 西 暦 | 摘 要 | 金 額 | 換 算 |
|-------|-----------|-----------|---------|---------|
| 正徳年間 | 1711-1716 | 江 戸 | 銭1貫200文 | ¥13,434 |
| 明和以降 | 1759 | 大坂豊竹芝居 | 銭1貫500文 | ¥25,176 |
| | | 新芝居 | 銀18匁 | ¥20,142 |
| | | 北新地芝居 | 銀21匁 | ¥23,499 |
| | | 人形操り芝居 | 銀15匁 | ¥16,785 |
| | | 稻荷境内子供芝居 | 銭264文 | ¥ 4,488 |
| | | 御霊境内子供芝居 | 銭1貫248文 | ¥20,946 |
| | | 座摩境内子供芝居 | 銭264文 | ¥ 4,488 |
| | | 道頓堀竹田からくり | 銭330文 | ¥ 5,610 |
| | | 荒木芝居 | 銭1貫500文 | ¥25,176 |
| 寛政年間 | 1789-1801 | 京 都 | 銭2貫600文 | ¥48,739 |
| | | 大 坂 | 銀21匁 | ¥26,250 |
| | | 操り人形芝居 | 銀12匁 | ¥15,000 |
| | | 江 戸 | 銀35匁 | ¥43,750 |
| 文化10年 | 1813 | | 金1分2朱 | ¥28,175 |
| 天保年間 | 1830-1844 | 江 戸 | 銀35匁 | ¥32,270 |
| | | | 銀21匁 | ¥19,362 |
| | | | 銀60匁 | ¥55,320 |
| | | | 銀27匁5分 | ¥25,354 |
| 嘉永年間 | 1848-1864 | 京 都 | 銀70匁 | ¥65,380 |
| | | | 金1両1分2朱 | ¥77,061 |

参考文献：堂本寒星著「上方演劇史」・服部幸雄著「江戸歌舞伎論」

足立直郎著「歌舞伎劇場女形風俗細見」

小野武雄著「江戸物価事典」

注：

- (31) 朝倉治彦編・喜田川守貞著「守貞漫稿」 P440
- (32) 宮内輝武稿「旅芸人の収支計算 興行篇」平成1年 白鷗女子短大論集 P147-148 寛政期の大坂の劇場と、化政期の江戸市村座の客席配置図を参照されたい。
- (33) この小論での、現在円貨換算は年代毎の異なった比率により計算している。従って、上昇傾向などを見るときは、円貨による価格で比較の方が実質的な上昇率になる。
- (34) 飯塚友一郎著「歌舞伎概論」P475
茶屋の勘定書には土間代・敷物代・お菓子・お酒・御取肴・御弁当・御膳（夜食）などが含まれている。
- (35) 服部幸雄著「江戸歌舞伎論」P143-147
林玲子著「江戸店犯科帳」昭和57年 吉川弘文堂 P151-153
- (36) 服部幸雄著「江戸歌舞伎論」P165

(5)

近世の大衆が最も楽しみにしたレジャーの一つが歌舞伎見物であることは間違いないことで、例えば鹿島万兵衛の「江戸の夕映」⁽³⁷⁾によると、江戸三座といわれた中村座・市村座・守田座はすべて浅草観音近くの猿若町にあり、観劇する人々にとっては、遠い道のりであったが「好める道とてさのみ遠しとも思わず」徒歩で出かけた。当時の芝居の開幕が五っ（朝8時）で、閉幕が夜五っ（夜8時）または九っ（夜12時）で、芝居見物には一昼夜を費やすほどであり、大変な大仕事でもあった。しかも、既に述べたように収入と比較して観劇の費用は大きく民衆に取っては高根の花的な存在であったかも知れない。低収入の多くの江戸の市民たちに取っては、神社の境内で興行される簡易な宮芝居で満足するか、それもできないとすると、貸本屋でかり

た黄表紙本などで、歌舞伎のパロディを読んで楽しむか、式亭三馬の「浮世風呂」⁽³⁸⁾にあるように、銭湯での噂話で満足するのが精いっぱいであったかもしれない。歌舞伎の収支計算を考えると、大衆から遊離した世界の出来事のような気もしてくる。⁽³⁹⁾

注：

(37) 鹿島万兵衛「江戸の夕栄」昭和52年 中公文庫 P74-75

七代目松本幸四郎の「芸談一世一代」のなかに明治初年の芝居見物について次のような記載がある。「そのころよく芝居見物は三日がかりといわれたものでした。前の一日は芝居で食べる御弁当やおやつの用意に費やし、重箱の中にさまざまなご馳走を詰め、上戸のかたは酒の支度まで調えるのです。そしてその日は早寝し翌朝は暗いうちに起きて支度をして、重い重箱を抱えて家を出ていくのです。

(七代目松本幸四郎著「芸談一世一代」昭和23年 右文社 P19-21

(38) 中村通夫校注「浮世風呂」昭和32年 日本古典文学体系 岩波書店 P79-80

(39) 本稿は昭和60年8月「大阪学院大学通信」第16巻第5号に発表した原稿を加筆・修正したものである。